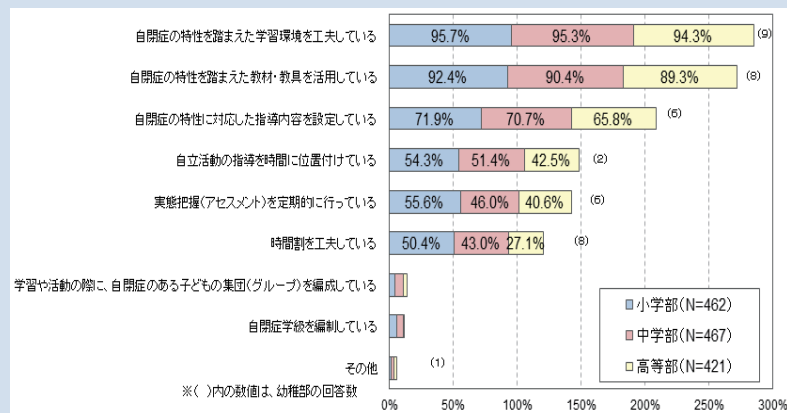


自閉症教育研究班 平成28～29年度基幹研究（障害種別）
 「特別支援学校（知的障害）に在籍する自閉症のある幼児児童生徒の実態の
 把握と指導に関する研究-目標のつながりを重視した指導の検討-」

特別支援学校（知的障害）に自閉症のある
 子どもの**在籍数**は、増えているのか？

- 幼稚部（74.1%）、小学部（49.4%）、中学部（46.3%）、高等部（36.7%）いずれも在籍率が増加
- 高等部で在籍率の増加が顕著

特別支援学校（知的障害）での
 自閉症教育の取組状況は？



取組の成果

「心理的に落ち着いて学校生活を送ることができる」
 (96.2～97.4%)、「子どもの特性に合った環境を
 設定しやすい」(61.7～70.8%)

取組の課題

「個別の対応が多くなる」(47.5～56.5%)「特定の
 教師との関わりになりやすい」(31.0～46.3%)



- 心理的に安定した学習環境の下での自閉症のある子どもの**学びの成果**を追究することが課題
- 指導目標のつながりを重視することは、教師が**見通し**をもって指導することにつながる
- 実態把握が難しい自閉症のある子どもにおいては、日々の授業とその振り返りが重要
- 活動内容ではなく、子どもに「**つけたい力**」から指導目標を設定することが大切

多くの学校の各学部で、
 自閉症の特性を踏まえた取組が定着（学校体制）
 個々に応じた指導では、
 指導目標の設定が重要（個別性）

自閉症のある子どもの**指導目標の設定や見直し**
 では、何を大切にすべきか？

長期・短期目標、単元目標間の**つながり**や各教科等を
 合わせた指導での自立活動の目標との**関連性**を重視した
 指導から明らかになった**ポイント**

- 1 「目標＝活動内容」ではなく、子どもにつけたい力から目標を見直す
- 2 評価のしやすさではなく、子どもにつけたい力を具体化する
- 3 指導の段階性を踏まえて、子どもにつけたい力を明確にする
- 4 子どもの達成状況を踏まえて、できることを伸ばす視点で発展的に目標を設定する
- 5 教育活動全体を通じて柱となる自立活動の目標を明確にする



- ◆柱となる目標をぶらさずに、子どもの興味・関心などに応じて題材を柔軟に変更できる
- ◆各単元の目標のつながりが明確になることで、目標に沿った働きかけや工夫ができる
- ◆子どもにつけたい力が明確になることで、重視すべき目標が明確になる
- ◆具体的な目標を設定することで、評価の観点が明確になる

自閉症のある子どもにとっての**主体的な学び、対話的な学び、深い学びの追究**へ



特別支援学校（知的障害）に在籍する自閉症のある幼児児童生徒の実態の把握 と指導に関する研究-目標のつながりを重視した指導の検討-

（平成28年度～29年度）

【研究代表者】 柳澤 亜希子

【要旨】

本研究では、特別支援学校（知的障害）610校の各学部を対象にアンケート調査を行い、自閉症のある子どもの実態を把握し、自閉症に特化あるいは対応した自閉症教育の取組状況とその成果及び課題を明らかにした。本調査の結果、各学部において自閉症のある子どもの在籍数が増加しており、特に高等部で顕著であった。また、高等部は他学部比べて、「軽度」の実態の子どもの割合が高かった。さらに、自閉症に対応した取組の成果としては、どの学部も子どもが「心理的に落ち着いて学校生活を送ることができる」、「特性に合った環境を設定しやすい」ことが挙げられた。一方、課題には、「個別の対応が多くなる」、「特定の教師との関わりになりやすい」ことが挙げられた。

また、本研究では、研究協力機関（4校6事例）での実践研究から、担任が自閉症のある子どもの目標設定に関わる課題をどのように認識しており、どういった視点や意図をもって目標設定（見直し）を行っているのかを検討した。加えて、目標のつながりを重視した指導を行うことによる担任の指導や自閉症のある子どもに対する捉えの変容についても検討した。実践研究の結果を踏まえて、自閉症のある子どもの指導で目標のつながりを重視することの意義と目標設定（見直し）のポイントをまとめた。

本研究を総じて、特別支援学校（知的障害）における自閉症教育の充実と専門性の向上のために重視すべきこと、また、センター的機能として小・中学校などに対して発信することが期待されることについて言及した。

【キーワード】

特別支援学校（知的障害）、自閉症、目標のつながり、目標設定（見直し）のポイント

【背景・目的】

インクルーシブ教育システム構築の中でセンター的機能としての役割が一層期待される中、特別支援学校（知的障害）が小・中学校などに対して助言や援助を行うためには、自閉症教育の専門性の向上が不可欠である。このため、本研究では、2つの柱で研究を実施した。具体的には、特別支援学校（知的障害）に在籍する自閉症のある子どもの実態（在籍状況や知的障害の程度など）を把握し、自閉症に特化あるいは対応した取組状況とその成果及び課題を明らかにすることを第1の目的とした。

また、自閉症のある子どもの指導では、個別化された系統性のある指導を行うことが重要視されている。このためには明確な目標を見据えて、そこに至るまでにどういった指導を積み上げていくか、すなわち目標設定が重要となる。そこで、本研究では目標のつながりに焦点を当て研究協力機関での実践から、担任がどういった視点や意図をもって指導目標の設定（見直し）を行っているのかを検討することを第2の目的とした。また、目標のつながりを重視した指導を行うことによって、担任の指導や自閉症のある子どもに対する捉えがどのように変容するのかについても検討した。

【方法】

1. 自閉症教育の取組状況とその成果及び課題に関する調査

過去または現在において、自閉症に特化あるいは対応した取組を実施している（した）特別支援学校（知的障害）8校（研究協力機関を含む）の学部主事を対象に訪問による聞き取り調査を実施した。その上で、610校の特別支援学校（知的障害）の各学部主事を対象に自閉症のある子どもの在籍状況や知的障害の程度、自閉症教育の取組状況とその成果及び課題についてアンケート調査を実施した。

2. 自閉症のある子どもにおける目標のつながりを重視した指導に関する実践研究

研究協力機関（4校）の自閉症と診断を受けている子ども（小学部2事例、中学部1事例、高等部3事例の計6事例）の個別の教育支援計画と個別の指導計画の目標間のつながり、対象授業の個別の指導計画の長期目標と短期目標のつながり、各教科等を合わせた指導での自立活動の目標との関連性を検討した。担任には、指導目標のつながりを重視して事例対象の授業を行ってもらい、継続的に授業記録をとってもらった。この授業記録の記述や担任との協議を踏まえて、担任がどのように指導目標のつながりを意識し、どういった視点や意図で目標設定（見直し）を行っているのかを分析した。また、指導目標のつながりを重視することにより、担任の指導や事例対象の子どもに対する捉えがどのように変容したのかについても分析した。

【結果と考察】

1. 特別支援学校（知的障害）に在籍する自閉症のある子どもの在籍状況と実態

610 校中 490 校（幼稚部 11 校、小学部 470 校、中学部 469 校、高等部 423 校）から回答が得られ、回収率は 80.3%であった。

国立特殊教育総合研究所（2005）の調査と本調査結果を比べると、幼稚部は 69.0%から 74.1%、小学部は 47.5%から 49.4%、中学部は 40.8%から 46.3%、高等部は 25.2%から 36.7%と増加しており、高等部の増加が顕著であった。また、在籍する自閉症のある子どもの障害の程度は、幼稚部から中学部では中度から重度の子どもが、軽度や最重度より多い割合で在籍していた。その中で高等部は、軽度の子どもが 29.7%と中度（25.7%）や重度（30.3%）とほぼ同程度に在籍していることが明らかとなった。高等部での知的障害の程度が軽度の自閉症のある子どもの増加は、中学校特別支援学級から特別支援学校（知的障害）高等部に進学するケースの多さが関与していると推察された。

2. 特別支援学校（知的障害）における自閉症教育の取組状況とその成果及び課題

いずれの学部も自閉症の特性を踏まえた「学習環境の工夫」（94～96%）が最も多く、次いで「教材・教具の活用」（89～92%）、「指導内容の設定」（65～71%）が挙げられた。この結果から、特別支援学校（知的障害）では、自閉症の特性に対応した取組が定着していることが示唆された。一方、「自閉症のある子どもの集団（グループ）を編成している」、「自閉症学級を編成している」との回答は、いずれの学部も 10%以下と少なかった。これには、他の子どもたちとの関わりが少なくなることや教師との関わりが固定されてしまうなどへの懸念が関与していると考えられた。また、自閉症学級の編成の有無にかかわらず、自閉症の特性に対応した学習環境の工夫がなされていることも影響していると考えられた。

自閉症に対応した取組の成果としては、どの学部も自閉症のある子どもが「心理的に落ち着いて学校生活を送ることができる」（96～97%）との回答が最も多く示された。この成果は、自閉症の特性に応じた指導内容として「気持ちを落ち着かせる手段を身につけること」を課題に感じていたことや「自閉症の特性を踏まえた学習環境を工夫している」ことが、取組の成果に反映していると考えられた。一方、課題として、「個別の対応が多くなる」（46～57%）、「特定の教師との関わりになりやすい」（31～46%）ことが多く挙げられた。自閉症の特性に対応した指導内容として、特に「自らの意思（要求や拒否等）を伝えようとする」ことを課題に感じていることで重点的に指導していること、また、個人内スキルの向上に重点が置かれていることが推察された。

3. 自閉症のある子どものつながりのある指導の重要性とポイント

自閉症のある子どもの指導目標の設定において担任が感じている困難さや課題としては、子どもの実態が捉えにくい、具体的に指導目標を設定することが難しい、目標が活動内容になるなどが挙げられた。これらの課題を踏まえて、研究協力機関には目標のつながりを重視した指導を行うことで、指導目標の設定（見直し）と授業改善に取り組んでもらった。本稿では紙面に限りがあるため、図 1 に 6 事例の実践から明らかになっ

た指導目標の設定（見直し）のポイントの概要を示した（図1）。各実践の具体と指導目標の設定（見直し）のポイントの詳細は、研究成果報告書をご覧ください。

実践1：

長期目標の達成を目指した段階的な指導と子どもの興味・関心の重視

- 長期・短期目標の設定の意図を明確にすることで、目標間のつながりが明確になる
- 長期目標の達成に向けて、必要な力を段階的に指導する
- 目標をぶらさずに、子どもの興味・関心や反応に応じて題材を柔軟に変更できる

実践2：

短期目標の明確化と単元目標間のつながりを意識した指導

- 「目標＝活動内容」ではなく、前期の間に子どもにつけたい力から目標を見直す
- 単元目標の設定が具体化され、各単元間のつながりが明確になることで、目標に沿った働きかけや工夫が可能になる

実践3：

年間目標との関連性とスモールステップによる短期目標の明確化

- 年間目標との関連性と子どもの実態から、特定の課題に限定して設定されていた前期の目標を見直す
- スモールステップで目標を見直し、前期と後期でねらう目標を明確にする

実践4：

柱となる自立活動の目標の明確化

- 教育活動全体を通じて柱となる自立活動の目標を明確にする
- 「目標＝活動内容」ではなく、子どもにつけたい力から目標を見直す
- 子どもにつけたい力が明確になることで重視すべき目標も明確になる

実践5：

指導の段階性を踏まえた短期目標の設定

- 長期目標の達成を目指し、指導の段階性を踏まえて、子どもにつけたい力を明確にする
- 子どもの達成状況を踏まえて、発展的に目標を設定する

実践6：

目標の具体化による評価の観点の明確化

- 評価のしやすさ（数値目標の達成）ではなく、子どもにつけたい力を具体化する
- できることを伸ばす視点で目標を見直す
- 具体的な目標を設定することで評価の観点が明確になる

図1 各実践で明らかになった指導目標の設定（見直し）のポイント

【総合考察】

1. 高等部における学びの連続性の確保と自閉症のある子どもの学びの成果の追究

高等部に、知的障害の程度が軽度の子どもの占める割合が高かった。これには、中学校特別支援学級からの進学者が影響していると推測された。この状況は学びの連続性の確保に関わる課題を示すものであり、特に高等部でその課題が大きいことがうかがえた。子どものこれまでの学びを高等部にどのようにつないでいくのか、教育の円滑な接続の観点から高等部の教育課程について、さらに検討と改善を進めることが必要である。

本研究の調査から、自閉症の特性を踏まえた学習環境の工夫と教材・教具の活用が高い割合で実施されており、自閉症の特性に対応した取組が定着していることが明らかとなった。また、本調査では物理的な学習環境を整えることで、自閉症のある子どもの心理的な安定をもたらすことが示された。今後は、自閉症学級の編制やそうした集団編成を行って指導することも含めた学習環境の整備により、自閉症のある子どもの学びにどういった成果がもたらされるのか、根拠をもって示すことが求められる。特に、行動面の問題に注意が向けられやすい自閉症のある子どもにおいては、その予防や改善に重きが置かれることが少なくない。自閉症のある子どもが心理的に安定した学習環境の下で、「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「何が身に付いたか」（文部科学省，2017）を追究していくことが自閉症教育の充実のために必要である。

2. 自閉症のある子どもの主体的な学びを引き出すための「目標のつながりを重視した指導」の意義と指導目標の設定（見直し）におけるポイント

①指導目標のつながりを重視することの意義

実践研究では、個別の教育支援計画や個別の指導計画の各目標、単元目標などの目標間のつながりを重視して、指導目標の設定（見直し）を行った。この結果、つながりという点では子どもにつけたい力を段階的に捉えて目標を設定し、指導することの必要性が示された。段階的に指導目標を設定することで、教師は目標達成のために授業で子どもにどのような関わり方をしたらよいか意識することができ、指導の柱が明確になった。

また、指導目標のつながりのもう1つの視点として、各教科等を合わせた指導（作業学習）での自立活動の目標との関連性を検討した。教育活動全体を通じた自立活動の目標を明確にして、それとの関連性から作業学習の目標を見直した。この結果、教師は、自立活動の目標が全ての教育活動の柱であることに気づくことができた。このように、指導目標のつながりを重視することは、教師が達成すべき目標に向けて見直しをもって指導することになる（国立特別支援教育総合研究所，2016）ことが明らかとなった。

②日々の授業の振り返りを通しての実態把握

自閉症のある子どもの実態把握の難しさから、年度初めに個別の指導計画の目標を具体的に設定することが難しかったり、大まかな目標設定になったりすることが示された。この場合、仮説的な目標から日々の授業の子どもの様子を踏まえて目標を絞り込み、具

体化することが大切である。授業記録を基に振り返りを行うことで、教師は目標を常に意識することができ指導すべきことが明確になる、子どもにどのような言葉かけをしたり、働きかけをしたりすることが効果的なのかを考えながら取り組むことができる、より詳しく子どもの現状を観察することができるようになるといった変容が認められた。

③活動内容ではなく、子どもに「つきたい力」から指導目標を設定すること

子どもにどのような力をつきたいのかという視点から、活動内容になっていた指導目標の見直しを行った。この結果、活動を通してどのような力を子どもに育てていくかという視点でねらいを定めたことで、教師は指導目標のつながりがより明確になり、指導場面で目標に沿った働きかけをすることが可能となった。また、子どもにつきたい力を明確にしたことで重視すべき目標が明確になり、教師は生徒の目標達成に向けて教材の工夫や改善を積極的に行ったり、指導目標に基づきながら生徒の様子に応じて柔軟な対応がなされるようになったりした。このように、教師において子どもにつきたい力が具体化されることで指導目標を設定した理由が整理された。

3. 自閉症のある子どもの指導における「個に応じること」の意味

アンケート調査の結果から、多くの特別支援学校（知的障害）で自閉症の特性に応じた学習環境の工夫や教材・教具の活用がなされており、自閉症の特性を踏まえた取組が校内全体で取り組まれていることが明らかとなった。自閉症のある子どもの教育では、この障害の基本的な特性を踏まえることが必須である。一方で、教育現場の多くが苦慮しているように自閉症のある子どもの実態は多様であり、表面上は同様の特性（行動）を示していてもその背景は異なるため、画一的な対応方法では必ずしも上手くいかない。このことこそが、自閉症教育の難しさであると言えよう。特別支援学校（知的障害）においては、これまで個々の自閉症のある子どもに応じた指導について検討を重ね、実践を積み上げてきた。今後、特別支援学校（知的障害）がセンター的機能として小・中学校などへ助言や援助を行う際には、このことを強調することが求められる。

【成果の活用】

特別支援学校（知的障害）での自閉症教育の取組状況に関するアンケート調査については、学校現場向けに結果の概要をコンパクトにまとめたリーフレットを作成し、関係者に配付し、当研究所 Web サイトに公開した。また、本調査の結果は、全国特別支援学校知的障害教育校長会や日本特殊教育学会第 55 回大会、『特総研ジャーナル』で発表し、当研究所の研修講義でも活用した。さらに、研究成果報告書で紹介した各校の実践例と自閉症のある子どもの指導目標の設定（見直し）のポイントは、学校現場での活用のしやすさを考慮してリーフレットを作成した（平成 30 年 3 月完成）。今後は、全国特別支援学校知的障害教育校長会から依頼を受けている刊行本の執筆に本研究成果を活用することや、平成 30 年度に公開研究成果報告会を開催することを予定している。